

ドン・キホーテの セルバンテス自叙伝 ごとく

スティーヴン・マロウ

増田義郎 [訳]

上



ドン・キホーテの
セルバンテス自叙伝 ごとく
スティーヴン・マーロウ 上
増田義郎[訳]

文藝春秋

THE DEATH AND LIFE OF MIGUEL DE CERVANTES
COPYRIGHT © 1991 BY STEPHEN MARLOWE
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH
CAMPBELL THOMSON & McLAUGHLIN, LTD., LONDON
THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

ドン・キホーテのごとく

セルバンテス自叙伝

上

一九九六年六月三〇日第一刷

著者 スティーヴン・マローウ

訳者 増田義郎

発行者 松浦伶

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話 〇三―三二六五―一二二

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一落丁・乱丁があればお取替えします

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-16-316340-9

アンとともに、

また

マールウとアダム・ザカリーの
ために

歴史の幻想と芸術の幻影は、いずれも不信の停止を必要とする。

アーサー・ケストラー

芸術は、歴史が殺したものに生命を与える。

カルロス・フエンテス

上卷
目次

プロローグ	11
-------	----

第Ⅰ部 ミゲル・デ・セルバンテスの死

第1章	17
-----	----

コロンブスとの関係、その他重要な家族問題の探求	17
-------------------------	----

第2章	30
-----	----

祖父が議論に負け、姉とわたしが夢をわかつこと	30
------------------------	----

第3章	55
-----	----

皇太子、階段より墜落	55
------------	----

第4章

美しい二千二百黄金ドゥカードの赤ん坊が
新世界をはねつけたこと……………

76

第5章

大いなる希望を抱いて王宮を訪れ、
首に賞金をつけられて逃亡すること……………

99

第6章

リツイオ・リツイオーネの友人たち……………

118

第7章

わたしがオウムになったことと、
老キュプロス人の話を含むその他の多くの奇譚……………

146

第8章

レパント！.....

166

第9章

弟とわたしが、英雄的行為に対して報いられたこと.....

179

第10章

アルジェリアで奴隸となり、
死の床のシデ・ハメテ・ベネンヘリに会ったこと.....

198

第11章

上演されない芝居の一景を書き直し、最初の脱走を試みること.....

227

第12章

そのころマドリードでは.....

255

第13章

わが身をかえりみず弟の命を救ったこと

281

第14章

タメジ?

306

第15章

危険な遊び

322

第16章

乙女

351

第17章

その人自身によって語られた

ミゲル・デ・セルバンテスの死

383

下巻 目次

第Ⅱ部 ミゲル・デ・セルバンテスの生

第18章 恋の罫と幻滅

第19章 四月二十三日に対処することを学ぶ

第20章 ある重要な秘密が明かされる

第21章 ガルシラソ・デ・ラ・ベガの行状とモロ人タルフェ

第22章 バヨナ通りのホスタル

第23章 破門され、呪われた者と宣言され、さらに悪い事態に陥ったこと

第24章 さらに危険な遊び

第25章 ムネモシユネが忘れられ、郷里から手紙をもらうこと

第26章 へさえすればのベンチを訪れる

第27章 もと来た道をまた

第28章 この物語にのみ見出される、いくつかの予期せざる展開について

第29章 〈無名機関〉の新しい無名の長が指名されたこと

第30章 愛の海、その他を漂って

第31章 ドン・キホーテの誕生と、クリストファー・マローウの死

第32章 ルーズ・チップिंगスにおける並ならぬ出来事

第33章 時が終わろうとも、真夜中は決して来ないだろうということ

第34章 飛ぶ馬クラビレーニョの宿命的な冒険、その他不可能なことども

第35章 ニアローバの干し葡萄とニファネガの小麦

第36章 ついに見出された二百二十九人目の処女

第37章 どこからでも千レグア

訳者あとがき

ドン・キホーテのごとく
セルバンテス自叙伝
上巻

装幀
坂田政則

プロローグ

正午の太陽が、わたしを吊るすために建てられた絞首台の影を、短く地に投げかけていた。

死刑執行の役人どもが市場通りの葬送行進を始めたころだろうな、とわたしは思った。そうだとすると、あの笛と太鼓の辛気くさい音楽が、「ゼルバンタイ！　ゼルバンタイ！　ゼルバンタイ！」とわたしの名前をわめきたてる咆哮にかき消されて聞こえないのも無理はない。あまりに怒り狂った絶叫なので、群衆が執行吏の役を買ってでたいのか、と思ったくらいである。しかしやがて、頭巾をかぶったモロ人たちの間に、ターバンを巻いたトルコ兵と、棍棒を持った近衛兵の不吉な一隊が姿を現わした。そしてアルジェリアの太守自身の槍兵が、後ろ手に縄をかけられ、両脇を近衛兵に守られたわたしの立つ台のまわりを、ぎこちない動きで取り巻きはじめた。奴らはわたしではなく、槍兵たちが見ているもの、すなわち群衆を注視していた——わたしは予兆であり、兆しであり、奇跡であり、このわたしの死とともに、この、すでに打ちひしがれた町は滅び去るのではないか。とすれば、群衆の怒りは、このわたしではなく、わたしを殺そうとする人間にこそ向けられるべきではないか。

「錢持ってるか？」左手にいるトルコ兵がわたしに尋ねた。

わたしは首を横に振った。

「哀れな奴だ。ほんの二、三シアニで助けてやろうてえのに」

「どうやって？」

「引っ張ってやろうてんだよ。いやなに、ロープからだらりとぶらさがってもよ、ゆっくり息がつまってくのよ。三十分、いんやもつとかかる。もしお友達が苦しむのを見たくねえって奴がいればよ、足引っ張ってくれるのさ。そうすりゃ首の骨が折れてすぐ楽になる。ほんの小銭もねえってのか？」

わたしはまた首を横に振った。もうすぐこの首を縄が支えてくれる。

気がついてみると、ここ数年ではじめて、祖父の〈家長〉ホアンのこと、そしてその突然の死について考えていた。生涯ではじめて出会った、人の死だった。わたしはいらいらと追憶を頭から追い払った。絞首台の横梁の下に立つと、死のことしか考えられなくなるのだろうか。

かわりにわたしはゾイロスのことを考えることにした。

ゾイロスとは、歴史に現われる最初の文芸批評家である。底意地が悪いが、鋭く、相手を刺す機知に富んだ表現力を持っていた。紀元前四世紀に生き、『イリアス』と『オデュッセイア』をほとんど一行ごとにくさして生計を立てたので、ホメロスの災いと呼ばれた。当の盲人ホメロスは四百年も前に死んでいたから、弁護する人などいるわけがなかったのである。

それでもわたしは、他の誰よりもゾイロスがいてくれたら、と思う。自分の短い生涯では、批評家に容赦なく叩かれるようなものなど書いてはいないではないか？ わたしにはゾイロスすらないのだ。

考えこんでいるうちにこんなことを思った。もし死ななかったら、わたしは何を書くだろう。ぜんぜんわからない。

などと考えているうちに、一見ぜんぜん関係のない思いにふけりはじめる。もし笑う哲学者デモクリトスが言うように、無数の原子が無限の空間と終わりなき時間の中に漂っていて、その順列組み合わせが数限りなくあるとすれば、われわれが生き（そして死ぬ）この世界は、唯一の世界だろうか？ どこかに別の世界があると考えてどうしていけないのだろうか……

（かすかに音楽が聞こえてきた。そしてそれがだんだんに高まる。笛の高音と太鼓の低音が、群衆の怒号を越えて聞こえてくる。）

……ほとんどそっくりの世界。だが数十億の原子がちがった結びつきをしているのだから、少しばかりちがったところも出てくる。

（青いターバンを巻いた見栄えのしない男が処刑台に上がり、麻の輪綱を慣れた手つきで引つ張る。）

……そのちがいのひとつは、わたしが、今日、一五八〇年四月二十三日に死なないということだ。

（青いターバンを巻いた見栄えのしない男は、垂れ下がった輪綱の真下に箱を押しやって言う。

「時間だ」

わたしの名前を絶叫する群衆の声を聞くと、力が湧いて箱の上に上れた。頬が輪綱にぶつかって、輪綱が揺れる。人がヘビやナメクジの前で尻込みするように、わたしはちょっとたじろぐ。見栄えのしない男は、輪綱をわたしの首にするりとほめる。

空は雲ひとつなく、無慈悲な太陽に漂白されて白っぽい真鍮色を放っていたが、雷鳴がとどろき、二股に分かれた稲妻が、港に突き刺さる——これはわたしの死の簡単至極な物語に唯一不可解な様相を付け加える。迷信深く、奇跡に飢えたモロ人たちが、地面にひれ伏す。そのとき死刑執行人の従者の中の体格のいい男がふたり、わたしの足元の箱を蹴飛ばし、わたしは台の上五十

センチメートルにぶらさがる。

そしてそのあとは？ そうなんだ。驚くべきことが起こるのだ。
でも、よく考えてみると、それほど驚くべきことなのだろうか。